

投資に役立つ

経済ワード

Vol.3

為替レート

為替レートは基本的には、その通貨を「買いたい」という需要と「売りたい」という供給のバランスで決まります。

需給を動かす要因は様々ですが、中長期的なトレンドをつかむには、購買力平価という考え方があります。



為替レートの変動要因

為替レートとは、異なった二つの通貨の交換比率です。円と米ドルなら「1米ドル = 100円」などと表示され、そこから1米ドルが120円に上昇すると「円安・米ドル高」、80円に下落すると「円高・米ドル安」となります。

為替レートは基本的には、その通貨を「買いたい」という需要と「売りたい」という供給のバランスで決まります。需給を動かす要因は様々で、要人の一言で短期的に為替が動くこともあります。中長期的なトレンドをつかむには、購買力平価という考え方があります。

■ 為替レートに影響を及ぼす事柄

- 短期 ↑
- 要人の発言
例：トランプ米大統領のドル高支持の発言
 - 地政学リスク
例：戦争や紛争
 - 金利差
例：米利上げによる新興国からの資金流出
 - 経常収支
例：経常黒字国は通貨高
- 長期 ↓
- 購買力平価

上記は為替レートの変動要因の全てを説明するものではありません。

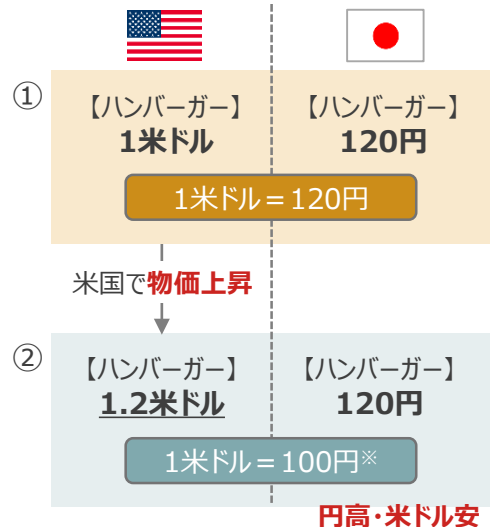
中長期的な方向性をつかむ

購買力平価とは、為替レートが2国間の①購買力の比率と、②物価上昇率の比率に応じて変化するという考え方です。

- ① 同じハンバーガーが米国で1米ドル、日本で120円とすると、1米ドルと120円で同じものが買える（購買力が等しい）ので、為替レートは1米ドル = 120円が妥当という考え方。
- ② 同じハンバーガーが米国で1.2米ドルに値上がりし、日本では120円のままとすると、米国の通貨価値は下落し、円高・米ドル安に動くという考え方。

実際の為替レートが購買力平価から乖離することはしばしばあります。ただし、大きく乖離している状況では輸出入に有利・不利が生じるなどし、為替レートは中長期的には購買力平価の水準に向かうと考えられています。為替レートの中長期的な方向性を探るうえでは有効な考え方と言えます。

■ 購買力平価の考え方



※1.2米ドル = 120円 → 1米ドル = 100円
上記は「購買力平価」の全てを説明するものではありません。

当資料は、投資環境に関する参考情報の提供を目的として野村アセットマネジメントが作成したご参考資料です。投資勧誘を目的とした資料ではありません。当資料は市場全般の推奨や証券市場等の動向の上昇または下落を示唆するものではありません。当資料は信頼できると考えられる情報に基づいて作成しておりますが、情報の正確性、完全性を保証するものではありません。当資料に示された意見等は、当資料作成日現在の当社の見解であり、事前の連絡なしに変更される事があります。なお、当資料中のいかなる内容も将来の投資収益を示唆ないし保証するものではありません。投資に関する決定は、お客様ご自身でご判断なさるようお願いいたします。投資信託のお申込みにあたっては、販売会社よりお渡します投資信託説明書（交付目論見書）の内容を必ずご確認ください。ご自身でご判断ください。